

モンスターハンター・オンライン—Monster Hunter Online—

セイイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2025年の未来　MHシリーズ初なるVRMMOACT用オンラインゲーム『Monster Hunter Online』のサービスが開始されるがその半年後・・・あまりにも生々しく高難易度であるがため即引退するプレイヤーが続出、鬼畜トラウマゲーというレッテルが貼られ発売当時数万人いたプレイヤーが日に日に減少していった。

そんな中・・・

SAOから帰還したプレイヤー『HAISU（ハイス）』はこのゲームの世界観とゲーム性にハマリプレイヤー人口がだんだんと減っていく中でもただひとり上位ハンターを目指してのんびりと狩猟生活を満喫していくのであった。

作者豆腐メンタル

誤字脱字がありましたら気軽にどうぞ！

感想待ってます。

目次

序章：モンスターハンター	1
第1章 黒の剣士と可憐な歌姫	
第一話 始まる勇気	5
第二話 切り裂く少年	17

序章：モンスターハンター

「がはあ!!やめろ!!うわああああ!!」

広大なフィールド、美しい大地・・・まさに絶景と呼べる山の数々。ハンター達の中では名高いエリア『森と丘』では美景とは裏腹に背痛な悲鳴が響き渡った。

「ガロさん!!」

そこには三人のハンターがいた。

しかしハンターの一人は前の光景に、絶望する。

「があ・・・ぐが・・・ぐぐが・・・」

『GARROさんが捕食されました』

男の仲間はガラスのように碎かれ、その破片は飛竜の体内にはいるそれはまさしく獣が肉を食べ散らかすように。あたりに血のような破片が撒き散らされる。

匂いも生臭く、まるで本当にモンスターに襲われる感覚だった。

飛竜は捕食を終わらせると目の前の二人のハンターを睨む。

「ガロ・・・さん・・・」

「つく・・・くるな・・・うあああああ!!」

「ギエエエエエエエエエ!!」

飛竜は咆哮をと轟かせ二人のハンターに正面から突っ込む。

二人は動かない・・・いや動けなかった。

目の前で見えた仲間の死に絶望したからではない。

自分の無力さを思い知らされたのではない。

ただ、目の前の龍が恐ろしかった・・・それだけだった。

二人は死を覚悟する・・・しかしそれは一つの閃光によって無駄になった。

あたりが眩しく輝き、正面から突進してくるはずだった飛竜は眩暈をおこし動きを止める。

「せ・・・閃光玉・・・」

「い．．．いいいったい誰が．．．」

「初心者がいきなり大型モンスターを討伐するんじゃない．．．」

男性の声が聞こえる。狩人の声が

「ゲーム機でやるのとわけが違う、もうちよつと実力をつけてから挑むんだな」

「あ．．．あんたは」

そこに現れたのはモスグリーンの防具、ここ（MHO）では珍しいレイアシリーズを一式揃えた男性ガンナーであった

男性は『ヴァルキリーファイア』を携えレイアに狙いを定める。

「俺はただのガンナーだ．．．その程度の実力でレイアに挑もとは．．．はてや携帯ゲーム系のMH出身か？」

男性はルーキハンター二人を睨む。

「え．．．まあ．．．はい」

「ふむ．．．まあいいや、目的のモンスターにも会えたし」

緑色の飛竜、雌飛竜、陸の女王にして最高のモンスター．．．。

リオレイア．．．ルーキーハンター達がまず第一目標とする大型モンスターの一匹。

『グワアアアアアアアアアアア』

「ひいひい!!」

眩暈から覚めたりオレイヤは三人に向かい威嚇の咆哮を轟かし突進する。

男性はとつさにライトボウガンに麻痺弾Level1を装填し連射する。

全6発を当て、リオレイヤは男性の目の前数センチの所で止まり麻痺状態になる。

後方でモンスターの咆哮にビビったのか尻待ちをついている二人のルーキーハンターに怒り混じりに指示をする。

「なにをやっている!?!、麻痺になっているから攻撃しろ!!」

「あ．．．はい!!」

二人のルーキーハンターはサーペントバイトを構えレイヤに切り

つる。

その間男性は目の前にパネルを開く。

画面に二つの狩技が表示される。『ラピッドヘブンI』『全弾装填I』

狩技とはこのMHOにおける必殺技のようなスキルだ。

男性はラピッドヘブンを選択し、ボウガンを構える

「狩技発動!!」

特殊弾を装填し、二人のルーキーハンターがレイアをダウンさせた瞬間に

高速連射する。

弾丸は全て頭部に集中砲火され、頭部破壊とともにレイアは力尽きる。

その瞬間、三人のハンターの前に『討伐完了』の表示が出る。

「はあ……はあ……た……助かった。」

「ぜえ……ぜえ」

二人のルーキーは緊張が解けたのか同時に地面に座り込む。

男性はそんな二人を無視して剥ぎ取り用ナイフを取り出しレイアを解体する。

鱗、爪、甲殻をそれぞれ剥ぎ取りアイテム化させポーチに入れる。

男性が淡々と剥ぎ取り作業をしている中、二人のルーキーはまだ立ち上がれなかった。

異様にリアルなモンスター……今までのVRMMORPGで体験することの出来なかった化け物に襲われる『本当』の恐怖感、死の恐怖。

「……はあ……はあ」

人間として当然の反応だ。

「このモンスターエネミーは他のVRMMORPGのエネミーとわけが違う……これに絶えられない奴はALOのようなゲームに行くことをお勧めするよ……」

そう、この『モンスターハンターオンライン』略してMHOと呼ばれるVRMMOACTはリアルを究極に追求したVRMMOであつ

た。

現実と区別がつかないほどの五感感覚・・・ピリピリとした緊張感・・・他のゲーム比べ物にならないリアリティ。

「んっじゃはい、これはお前たちの分の素材だ。」

男性は残った素材を二人の前に投げ捨てる。

「あ・・・ああ、ありがとう」

「あ・・・あんた、一体何者だ？」

男たちは問う、この究極の世界で、平然という男性に不思議の三文字しか思いつかなかったのだ。

ただでさえ、恐怖でその場を動けなかったほどのモンスターをいとも簡単に討伐をした。彼の全てに疑問を抱いた。

「俺は、ハイス・・・ただのモンスターハンターだ」

それもそのはず、彼はこれ以上もない恐怖を体感し、死と隣り合わせの世界でも勇敢にモンスターと戦った戦士

『SAO生還者（サバイバー）』なのだから。

第1章 黒の剣士と可憐な歌姫

第一話 始まる勇氣

初代モンスターハンターが発売されて11年後 2025年3月11日 『ザ・シード』と呼ばれるVMMORPG制作ソフトが世界中に配信され

VRMMORPGがブームとなった未来。とある会社がVRMMO向けのMHシリーズを発表した・・・

それが『モンスターハンターオンライン』略して『MHO』膨大なフィールド、リアリティを追求した新感覚狩猟生活。発売前は期待の新作として世界中が注目したこのゲーム・・・だったが・・・発売してから数ヶ月、当時数万人いたハンターたちが一気に減少した。その理由としてこのゲームは元来のMHと比べて超高難易度でリタイヤし減少、現実とは区別がつかない程のモンスターのリアリティでリタイヤし減少・・・。リアリティでリタイヤ？意味がわからない？

詳しくに言うと、新要素『捕食キル』があまりにも生々しく多くのプレイヤーにトラウマを植え付けたのだ。さらに捕食キルのデスクペナルティが全アイテム装備がロストという鬼畜機能で、ただでさえモンスターが強く難易度が高いこのゲームで多くのプレイヤーを脱落させるのは容易だった。リアル求めすぎだろ。俺も何度も死亡してけどモンスターに食われるとめっちゃ気持ち悪いぞ・・・。

しかし運営はこの機能を一切修正せず人口減少は一向に解決しなかった。

発売から半年、鬼畜トラウマゲーのレッテルを貼られだいぶ衰退てしまったこのゲーム。

しかし俺はこのリアリティにドツペリトはまってしまふ。
そうまるであの世界のように・・・いやそれ以上だった。

おれ『HAISU』こと羽咲スマイレはただのフリーターだ。

当時20歳、専門学校を卒業しいざ就活の時に気分転換でやったS

AOに閉じ込められ

無事生還してもどこも雇ってくれず・・・コンビニでバイトをする日々・・・。

そんなおれの唯一のストレス発散場所、それがこのMH0だ。

2025年の2月3日 夕方5:00 バイトから帰宅後軽く夕食をとり俺は早々と

ナーヴギアをつけベットに横になる。

アメスファイア? あんなのでMH楽しめるか!

「リンクスタート!!」

ゲームをスタートし、おれはMH01の街 砂漠の街『ロックタウン』にログインする

俺はまっさきに加工屋へ行き、昨日狩ったレイアの素材で新規で作成したヘビィボウガンを

強化に出す。

「なにを作ります?」

「妃竜砲を強化。あとパワーバレルをつけてくれ」

「かしこまり!!」

武器を預けると右上に『00:30』という時間が出る。

リアリティを追求したこのMH0、今までMHシリーズと違い生産、強化にも時間を有するシステムとなった。

俺は時間つぶしに酒場に向かい、街一面が見渡せる高台の席で酒を飲んでいた。

ゲーム内だが、実際飲んだと同じように酔うことができるので少し控えめだが。

「はぁ・・・随分と減ったな・・・この街も」

街を見渡す。発売初期で一番賑やだったこの街も、ざっと数えて100人程度しかいなかった。

俺はふと過去を思い出す。MH0はじめて、右も左もわからなかった頃に温かく迎えてくれて一緒に狩りをした仲間達のことを・・・。

「・・・・・・・・」

しかし、彼らはもういない・・・皆MHOを引退している。

あのモンスターのせいで・・・。
脳裏に浮かび上がる恐怖を化け物化したようなモンスター・・・思
い出すだけでも腕が震える。

しかし、スキル『ブレ抑制+1』で実際震えることはないがね。

「おう、ハイスはん！」

男性の声が聞こえ振り返るとそこには同じアルバイト先のハン
ター『牙王』が俺に声をかける

「こんばんわ牙王」

俺の数少ないMHOプレイヤーの友人『牙王』が俺の正面の席に座
り、アイルーに酒を注文する。

「その装備・・・お前リオレイアを狩ったんか!!さすがやな」

「最近レイア専門に狩ってたのでなあ・・・一人ではないけど」

「それでもや・・・はあ・・・ワイもレイアやレウスのよな飛竜種狩り
たいわー・・・」

「だったら早く装備を整えな・・・それか普通の携帯ゲームのMHやれ」
「なんでや!はあーよお言うよ、このトラウマゲーでそこまで言える
のはハイスはんくらいや」

「・・・ふん、あのゲームほどじゃない」

「せやな・・・でもさすがSAO内で『モンスターハンター』という二
つ名で呼ばれたことあるわ、さすがやで」

ああ：確かに呼ばれてたな。

俺はSAO時代 もっとも多くの種類のエネミーを狩ったことか
ら名づけられた二つ名だった。今では懐かしい。

「ふん、まあな」

「ん？」

牙王がなに気がつき俺の装備をじろじろ見る。

「そういえばいつからガンナーになったんや?最近まで剣士だったは

ずじゃ……」

ああ……そのことか。

「……いろいろあつてな……」

察してくれ……頼む。

「……あ……すまん。」

「いやいい……俺も人間だ乗り越えることが難しいトラウマがある……」

俺も人間だ……トラウマだって生まれる。俺はあるモンスターに『※捕食キル』をされ若干だがトラウマになった。そのせいで俺は武器を持つと手が震えるように……。

ガンナーにしているのはガンナー用スキル『ブレ抑制』があるからだ。これでもうにか戦える。

俺は懐から依頼表を取り出す

「クエスト受けるのか、だったらワイも一緒に！」

「ナルガのクエだけどいいのかな？」

クエストを見せる

そこにはナルガクルガのイラストが。

「げげえ……ナルガクルガ……遠慮するわ」

このMHOではハンターがフリーフィールドで目撃したモンスターをギルドに狩猟依頼して製作するクエスト『目撃クエスト』と呼ばれるクエストシステムがある。MHO内では結構重要なシステムで、その依頼を製作したハンターはそのクエストがクリアされた場合は少なからず素材の一部を手に入れることができ、失敗してもそのモンスターの詳細な情報が手に入るし、契約料ももらえて基本デメリットがない。

自分でクエストを受注して狩った方が素材を多く手に入れるしレア素材が手に入りやすいが……大型モンスターが狩れない初心者に

は重宝するシステムだ。

たまたま酒場に来る時ルーキーハンターが半べそかいてギルドに依頼しているのを発見して依頼を受けたのだ。

「せやけど・・・ナルガとはけっこう珍しいモンスターやないかい」

「ああ・・・ハンターが少なくなつて目撃情報がいまままでなかつたんだ：逃すわけにはいかない」

現在MH0ではハンター数減少とともに、『※フリーフィールド』でのレアモンスターの目撃情報が減少し大型モンスタークエストが少なくなっているのだ。レアモンスターならなおさらである。

運営が設定したクエストもあるがレアモンスターは基本、広大なフリーフィールドで自力で探し出す必要がある。モンスターの居場所がわかっている『目撃クエスト』はかなり希少価値が高いのだ。

俺は猫飯で体力+30を発動させ、受付へ向かう。パーティー募集をしなくてはいけません。

「んじゃ、いつてくる」

「おう、きいつけてな！」

パーティー募集をかけ二人のハンターが参戦した。

一人はHR4ボーンシリーズの防具にハンマー『ロックボーン』を装備した男性『ガリック』

もう一人はHR3ジャギシリーズの防具に片手剣『タスクギア』を装備した少女『ユウキ』

目撃情報があった樹海のベースキャンプにつき、それぞれ支給品ボックスからアイテムを取り出し狩りの準備をする。

「ナルガクルガなんて滅多に出んレアモンスターだ・・・絶対に狩るぞ!!」

「あ・・・はいー」

ユウキは少し緊張した声で答える。おそらくナルガを狩るのは初

めてだろう。

俺は出発前に受け取った新武器『妃竜砲【遠撃】』の調整をする。

「おいそこのガンナー……」

ガーリックが弾を装填している俺に話しかける。

「……なんだ？」

「どんな手でレイアを狩ったが知らんが……お前はもう大型モンスターの装備を一式揃えている、報酬の素材は俺が多めでも文句無いな？」

もらえる報酬の素材とお金の配分はパーティーで決めることになっっていた。

こういったパーティー内で一番装備が整っている人が報酬の減量を強いられることはよくある。

「ねえ、それは自分勝手すぎない？」

ユウキが反論する。

「なんに？こいつは大型モン一式揃えてるにに対して、俺ら等は雑魚装備……不公平とは思わんか？」

「でも、こういうのは平等に……」

「ああん？」

ガーリックがユウキの首を持つ

「があは……」

これはマズイ……実はVRMMOになってからPK機能も実施されてきた。

PKでも一乙扱い……仲間割れは避けたほうがいい！

「やめろ！わかった……いいだろう。」

「ほう……話のわかるやつじゃねえか」

ガーリックはユウキの首を離しユウキがその場に倒れこむ。

「げっほ……げっほ……」

「大丈夫か？」

「うん……なんとか」

俺はユウキの元へ駆け寄り、薬草を渡す。

若干だがダメージがあった。

「俺は先にいいってるぜ」

ガーリックはその場を後にし、搜索に出る。

「フリーフィールドだったら、PKしているところだ……」

「ごめんね……僕、まだ弱いから」

「いやいい、ありがとう」

俺はユウキに手を差し伸べる。

ユウキは俺の手を取り、立ち上がる。若干だが彼女の手が震えているのを感じた。

「少し緊張しているのか？初心者か？」

「うん、一昨日始めたばかりで……まだ慣れてなくて」

一昨日はじめてHR3か……初めての割には結構実力があるように見える。

「わかった、だったら俺がサポートする。」

これも玄人のやくめだ……まだ上位いってないけど。

「え？本当？」

「ああ、まずはモンスターの搜索だ。でもすぐに見つかる」

俺はマップは取り出し、スキルを発動する。『千里眼』だ

マップ上に映し出されたモンスター存在地のマークをユウキに見えるように指をさす。

その近くには青い矢印『ガーリック』のマークがあった。

「あいつの近くか……行くぞ。」

「あ、うん！」

俺が先導してナルガの元へ向かう。

「う……うわあああああ!!」

俺たちがついた頃には、ナルガクルガとガーリックが戦闘を行っていた。

ガーリックがハンマーで頭部スタンを狙うが、ナルガの素早い攻撃で、吹き飛ばされる。

「つくつそ!!」

ガーリックは空中で態勢を整えて着地するが、ナルガが急接近し刃

物のように発達した刃翼でガーリックを斬りつける

「ぐっが!!」

これはかなりの大ダメージ。

ガーリックの胸には切り傷のようにダメージポイントが赤く光る。

「あれが・・・ナルガクルガ」

ユウキが息を飲む。

俺は、ボウガン射撃に最適な高台に上り、通常弾Level3を装填し、ナルガに射撃する。

5発翼にヒットするが、同時にナルガは俺とユウキに棘を飛ばす
「つく!!」

ユウキは盾でガードし、俺は高台から飛び降りて避ける。

それと同時に空中で拡散弾Level1を撃ちナルガを怯ませる。

「ユウキいまだ!!」

「うん!!」

ユウキが一気に接近し、ナルガの頭部を斬りつける。

頭部を切られナルガはダメージを受ける。それに続き俺も通常弾を撃つ。

「グアアアアアアアア」

食らっている食らっている。

「この調子でいくぞ!!」

「うん!」

いいペースを掴めてきた・・・しかし・・・

「どけええええええええ!!」

ガーリックがハンマーをチャージし一気に接近をする。

すると、ナルガの頭部にスタンを決めるが、ユウキごとスタンを決めたため、彼女にもダメージを食らう。

「うわああああ!!」

スタンで吹き飛びナルガの後方へ飛ぶ、ナルガは態勢を整え、刃翼を回転切りのごとく

ガーリックとユウキに食らわせる。

「ぐわあああああ!!」

「うわあああああ!!」

二人に大ダメージ まずいこのままだと二乙だ。

俺は狩技『火薬装填I』を発動、特殊火薬を装填し弾の攻撃力を上げる。

そしてそのまましやがみ撃ちにきりかえ火炎弾を翼にめがけて連射する。

ガガガガガガガ

「ぎええええ!!」

ひるんだ隙にユウキは回復をし一気にナルガに斬りつける!

ガーリックは逃げエリアを移動する!。

「はあああああ!!」

ナルガの刃翼は砕かれ部分は破壊せいこう、ユウキは俺の元へ駆け寄る。

「やった!!」

「いい調子だ、このままいくぞ・・・ん?」

よし、なんとかいける。そう言った矢先、マップ上に見知らぬモンスターの影が急速に接近する。

この速度・・・覚えがある。

空を見上げると今まで晴れていた空が一気に曇り空に変わる。

まずい・・・奴だ・・・まさか樹海に現れるのか・・・!!

「どうしたの?」

「逃げるぞ……」

「え？」

「乱入モンスターだ……それもただもんじゃねえ」

『ガーリックが死亡しました』

急に現れるガーリック死亡メッセージ、ユウキもいきなりの通達に驚く。

「?!?!? どういうこと……」

「いいから逃げるぞ!!」

俺がボウガンをしまった瞬間、天候が急変、嵐に変わり、俺たちの行方を遮るように竜巻が発生する。

『乱入モンスター』MHOではよくあることだ。

モンスターは常にこの広大なフィールドを巡回しており、乱入なんて日常茶飯事……だったが、今回はわけが違った……。

「あれは……ナルガじゃない……」

相手が悪かった……これは逃げる以外選択肢はなかった。

目の前に錆びれたような色をしたモンスターが

ナルガクルガに襲いかかった。

ナルガの上へのつかり、押さえ込もうとするが、ナルガは抵抗、尻尾の棘を尖らせ攻撃し抜け出す。

そしてそのまま飛び立ち別のエリアに逃走をする。

しかし錆びれたモンスターは後を追わず、俺たちを発見し、睨みつける。

まずい……実にまずい……まさか现阶段で『古龍種』が現れるなんて

予想ができるか……。

俺はゆっくりと後ずさりをし、戦慄し『古龍種』の名前をつぶやく

「・・・クシャルダオラ」

脱皮中のおまけつき

「つく・・・まさかここでクシャルとは」

勝てないのは確実だ・・・捕食キルになる前に逃げなければ!!・・・しかし

周りには竜巻が発生し、逃げ道がない・・・嵐の強風で体も思うように動かせない

こうなったら

「つくう・・・」

「ユウキ、竜巻の中に飛び込め!!」

「え!?!」

「一か八かだ!!」

ここで最優先なのは捕食されないこと、どんな手を使っても逃げなければならぬ。

俺はユウキの手を持ち、竜巻の中に飛ぶ

「え、ちようわあああああああ!!」

俺たちは大ダメージで二乙・・・すると思いきや、俺たちの体は勢いよく空高く飛び上がり、そのままクエスト圏外の密林近くの湖に落下する。

キャラクター紹介

ハイス HR6

ガンナー

武器：妃竜砲

防具：レイアシリーズ（ガンナー）
スキル 耳栓、ブレ抑制＋1、通常弾威力UP、千里眼

今日用語

※『捕食キル』モンスターに捕食されて死亡すること、アイテム、防具、装備がロストしHRが1下がるという最悪のデスペナルイがあるこれにより多くのハンターが屈折したり モンスターに異常な恐怖心を覚えるようになる。

※『フリーフィールド』クエスト関係なしにフィールドに出で狩りできる。

スタイルは無いが狩技は二つまで設定可能

第二話 切り裂く少年

「はあ．．．はあ．．．助かった」

俺たちはモンスターが泳ぎ回っている湖をなんとか泳ぎきり、近くの古代遺跡で休憩をしていた。

まさかのクシヤルダオラの乱入で、少し焦ったがなんとか逃げ切れた。

「一時はどうなるかと思ったよ．．．」

緊張から解放されユウキはその場に座り息を整える。

「すまん、どうしても捕食は避けたかった．．．」

俺はユウキに頭をさげる。

いきなり竜巻に飛び込ませたんだ。相当びっくりしたに違いない。

「いいよ、ありがとう私を守ってくれて！」

彼女は俺に笑顔を向ける

「．．．．．！」

密かにドツキつとした。

落ち着け23歳童貞．．．まだ焦る時では無い、俺は狩り人．．．平常心だ！平常心を保て！。

それはさておき、俺はたどり着いた遺跡について少し気になっていた。

マップを確認するところにはマップにのっていないなかった、もしかした秘境の可能性がある。

秘境とは、マップには載っていないエリアのことであり、採掘場所ではレアな素材が超高確率で採掘ができる。

これはラッキーだと思いきやあたりを探索する。

ユウキも俺のあとを追う。

周りは崩れた高い石の壁にがあちらこちらに転がっていた。

中には40mを超える物もあった。

こんなフィールドがあつたのか……。特にモンスターはいない。誰もいないフィールドでユウキはある物を見つける。

「あれは……」

ユウキの視線の先を見ると目の前には巨大な門があつた、しかし入り口は固く閉まつており

先に進めは進めなかった。

俺はどうか開かないか調べるため門を触る。

するとシステムメッセージが出た。

そこには『HR8以上ではありません』という文字

HR8以上は上位レベル……そうかこの街が上位ハンターの街

「フォレストシティ……そうかここが」

『フォレストシティ』上位ハンター専門の街で、上位クエストを受注できると

上位モンスターが出現する新フィールドもこの先に存在する。

「入れないね……」

「ああ、ここは上位ハンターしかいけない領域だ」

俺は背の高い木に登りボウガンのスコープで門の内側の街を見る木々がと並行して建物が並ぶ、まさしく『フォレストタウン』だ

しかし人は一人もいない、それも当然か。

街を観察していると、湖広場に、ひとりの『女性』の姿を確認する。

顔はよく見えなかったが、服装は白く美しい……まさか上位ハンターか……いや違う。

「……ん？」

拡大しようとするがなぜスコープが覗けなくなる、目の前には『エラー』というメッセージ

「ん？どうしたの？」

「いや……何でもない」

なぜ、あそこに女の人が……。

このMHO内で上位ハンターなつた人はまだいない……上位ハン

ターになることができる上位解放モンスターは確かに出現しているが誰も狩猟していないはず……

「ナルガ狩りそこなっちゃし、どうするハイス!!」

木の下からユウキが叫ぶ

「どつちにしろクエスト指定領域から外れたからクエストリタイア扱いだ……」

「ええー 素材欲しかったのに……」

「でも、ある程度ダメージを与えることができた、いままでのMHシリーズと違って 個体が同じであればダメージはリセットされない、もう一回アタックすれば勝てるはずだ。」

「え……そうなのか!?!」

「どうする俺はもう一回アタックをかける……」

俺はアイテムポーチを確認し残弾を数える。

「あ……えっと……僕をそろそろログアウトしないと……」

とユウキは残念そうに答える。

そうか、気がつけば時刻は22:00 一般の人なら寝る時間だ。

「……そうか、わかったお疲れさん」

俺は木を下り、もう一度樹海に向かう準備をする。

そろそろクシャルもエリア移動しているだろう。

「なんかごめん」

「いい、俺一人で狩る」

ひとりで狩るのは慣れている。

「……あ、そうだフレンド登録してくれる? また貴方とパーティー組みたいし」

その言葉に俺の脳内に電撃が走る。

な……ふ……ふ……フレンド登録なんて……いつぶりだろう。

「……え……ああ構わない」

すこし動揺する。まさか少女とフレンド登録数とは。

「ありがとう、じゃあ」

俺はメッセージウインドウでユウキのフレンド登録を承認する。

「ありがとう! またね! お疲れ様でした。」

そういうと、ユウキはログアウトした。

ユウキと別れてから数分、俺は樹海に向かっていった。木々がだんだん

お生い茂り、そろそろ樹海エリアの入り口に着くというところでのりの少年ハンターを目撃する。

しかも樹海というそこそこ難易度の高いモンスターが出るエリアを、チャーンシリーズとハンターナイフ

という初期装備で行くとは、なんとも無謀というかバカというか……。

「おい、そのルーキー」

俺は少年ハンターを呼び止める

「あ……はい！」

「誰が知らんがそのルーキーその装備で樹海に行くなんて無謀だぞ？……」

「すいません……道に迷っちゃって……」

「道に？とんだ方向音痴だな……」

「あははは……」

俺は少年を追い越し、そのまま先に進む。

「ちよつと待ってくれ！……あの、よかつたら……街まで案内してくれませんか？」

街？マップを持っていないのか……マップも持たずフリーフィールドに出るとは。

本当の馬鹿だ、迷うのも当然か。

「街までかなり遠い、村だったら案内するが？」

普通はBC（ベースキャンプ）に止めてある飛行船もしくは船で街に戻るのだが、

ここからだとBCより村の方が近かった。

「あ……ああ頼む。」

一番近くの村は『オッサ村』樹海を越えた先にある。

ナルガ調査のついでにこのルーキーを送り届けてからやるか。

「ついでに」

俺は少年を連れ樹海に入る。

それとともに俺は千里眼を発動させマップを確認する。
ナルガ反応はない・・・もしかしたら逃げられたのか。

「はあ・・・」

「あの・・・どうしたんですか？」

「タメ口でいい・・・獲物を逃がしてな・・・」

「ああ・・・それは残念だったな」

しかし急にナルガの気配がマップに現れる。

「隠れる・・・」

「え・・・な・・・うわ!？」

俺は少年の胸ぐらを掴み背の高い芝生に隠れる。

すかさずヘビィボウガンを出し、スコープでナルガを観察する。

羽が破壊されている。俺が戦ったあの個体だ。

「ナルガクルガ・・・そうかここが」

周りを見渡す。そこは雑魚モンスター等小型モンスターは存在せず、ナルガは近くに落ちている

モンスターの死体を捕食していた、どうやらここはモンスターがスタミナを回復するエリアだったらしい。

千里眼に反応はなかったのはいささかきになるが今は目の前の敵に集中しよう。

「あれが・・・モンスター・・・」

「おい、ルーキーお前は先に村に行け・・・ってどこへ!!」

俺は目を疑った、少年はなぜ草むらから飛び出て、ナルガクルガに一直線で向かっていった。

まさかの行動に俺は驚きを隠せなかった。

「バカかか・・・あの装備で狩れるモンスターじゃないぞ!!」

案の定ナルガは少年に気がつき、咆哮をする。

少年はあまりの音に耳をふさぐ。

「つく!!」

「逃げる!!!」

通常弾 Level 2 を装填、弾を撃ちナルガを惹きつけようとする。

しかしナルガは目の前の少年を優先的に攻撃を開始した。

尻尾の棘を研ぎ澄まし、一気に少年に向かってテールアタックを切り出す。

「っは!!」

しかし少年はギリギリでかわしそのまま尻尾を切りつけそのまま流れるように

背中、顔と攻撃を繰り返す。

「なに!?!」

その攻撃に俺はまたもや驚かされる。

早い・・・なんとという反応速度・・・。

しかもその驚きはまだ続く。

少年はまるでナルガの攻撃先を見切っているかのように、避け、目にも止まらぬスピードでモンスターを斬りつける。

気がつけばナルガは全身部分は破壊されていた。

只者じゃない・・・一体何者だ。

しかし、ナルガも負けてはいなかった。咆哮し少年を怯ませそのまま刃翼で少年を斬りつける

初期装備だ、かなりのダメージを食らいう、そしてそのままと止めを刺そうと突進をする

「っく!!」

少年はなぜか回復をしない。まさか持っていないのか!!

俺は回復弾を装填し少年い撃つ

「!!」

「俺がサポートする・・・お前はそのまま切れ!!」

「ああ、サンキュー!!」

少年はなぜか片手剣に手をかざすが、何かを察したのかすぐにやめ、狩技を発動する

『昇竜撃I』

「はああああああ!!」

そして一気にナルガに止めをさす。

『討伐完了』

「やるな・・・お前・・・」

俺は少年のところに駆け寄る。モンスターにある程度ダメージが蓄積されていたものの、

初期装備でここまで戦うとは、なんとも奇想天外な・・・

「ソードスキルが出なかったけどね」

少年はなぜか片手剣を背中にかざす。まるで太刀をしまうように。

「・・・あ」

「?それは太刀じゃないから・・・」

「あ、あははは」

「まあいいそのモンスターの素材はお前のものだが、一部は俺がもらうぞ文句ないな?」

俺はナルガを剥ぎ取る。俺は刃翼と牙、鱗だけを剥ぎ取る。

「ああ」

「あ、自己紹介まだだったな俺はシベル・・・お前は」

そういえば自己紹介はしていなかった。

フリーフィールドでプレイヤーに出会ってもパーティーではないから名前の表示はない。

俺は自己紹介をする。そして少年はそれに答え、名を名乗る。

「ああ・・・俺はキリトだ」